

平成27年度新収蔵品

平成27年度の購入及び寄贈により、当館のコレクションに新たに加わった4作家の作品を紹介します。

吉田 蔵澤

(1722-1802)

蔵澤は、江戸時代中期の松山藩士で、風早(現・松山市北条)と野間(現・今治市)の二郡の代官を長らく務め、民衆から絶大な信望を集めたと言われます。その一方で若い頃から絵を好み、当時流行していた長崎経由の中国絵画の影響を受けた、雄渾な墨竹図を得意としたことから“竹の蔵澤”と称され、今も愛好家が多く存在します。かの正岡子規や夏目漱石もその作品を好んで入手しました。

今回収蔵されたのは、掛軸8幅对と六曲一双屏風が2対という大作ばかり。全て、愛媛を代表する企業の一つである(株)三浦工業創業者・三浦保氏(1928-96)の夫人・昭子氏からご寄贈によるもので、現存する蔵澤作品の中でも屈指の名品として知られていたものです。これまで当館が所蔵する蔵澤作品は、比較的小品が多かっただけに、大変充実したコレクションになりました。時に繊細に、時に豪放に、墨一色で、風に幹をしならせ葉を揺らす竹の様々な表情を描き分けるそのテクニックは、お見事といふほかありません。(長井)



吉田蔵澤《墨竹図》(部分)江戸時代中期 三浦昭子氏寄贈

田窪 恭治

(1949-)

フランスのノルマンディー地方でのサン・ヴィゴール・ド・ミュー礼拝堂(内壁に田窪が描いた地域の特産物である林檎により、「林檎の礼拝堂」として親しまれている)の仕事や、金刀比羅宮での数々の文化プロジェクト等で「風景芸術」へと展開し、現在も活躍中の田窪恭治(愛媛県今治市生まれ)による作品です。

この作品は、パフォーマンスを活発に行っていた初期の時代から廃材と金箔による作品制作に移った最初期の作品であり、身体の痕跡(田窪本人の手の跡)がくっきりと彫られているのが特徴です。田窪がこの時期に正に美術家として生きる決心をしたという30歳頃に制作された、記念すべき作品です。

田窪の木との関わりを紹介する展覧会が東京都美術館で開催されます。(杉山)

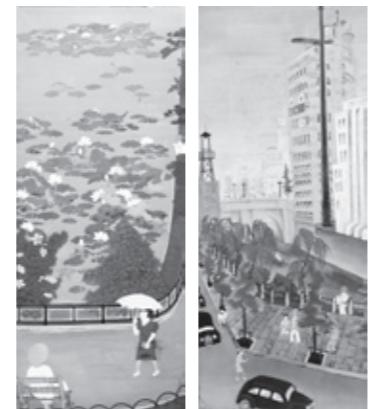
※「開館90周年記念展 木々との対話 -再生をめぐる5つの風景」
7月26日(火)~10月2日(日)
東京都美術館田窪恭治
《OBELISK(PACK EVENT)》1979年

木和村 創爾郎

(1900-1973)

愛媛の創作版画を代表する存在である木和村(松山市出身)は、大型の画面に、山岳や岸壁などの自然形態を大胆かつ幾何学的リズムで表現する迫力ある作風で知られています。日展や光風会展などで活動し、棟方志功・前川千帆らと日版会を結成、後年はフランスの国際公募展であるル・サロンで金賞を受賞するなど、版画家としての評価はすでに定まっている人ですが、もともとは京都市立絵画専門学校で日本画を学び、昭和18年(1943)に版画家に転向するまでは、日本画家として活動していました。

今回収蔵された2件の屏風作品は、いずれもこの日本画家時代の作です。戦時に失われてしまったためか、その大半が現存しないと思われるこの時期の作品の中でも、制作年や出品歴が判明し、かつ精緻な技術による大作である点で極めて価値の高いものです。これによって、木和村の初期の画業を把握することができる、基準的作例として位置づけられます。なお、描かれているのはいずれも、東京の実景(浅草寺や不忍池など)で、戦前の東京の風景・風俗をとらえている点でもユニークな作品です。(長井)

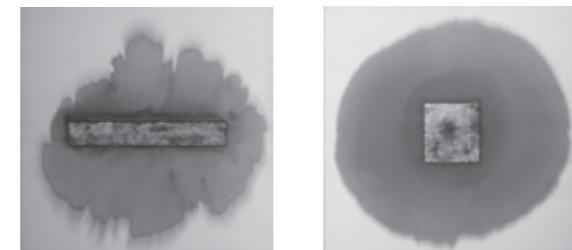
木和村創爾郎
《不忍池・数寄屋橋畔(新東都四景のうち)》昭和11年(1936)

浅山 仁

(1948-2014)

浅山仁(愛媛県松山市生まれ)は、洲之内徹らと青年美術家集団を立ち上げた渡部徹が1966年に設立した、松山美術研究所の一期生として学びました。多摩美術大学時代には、斎藤義重に学び大きな影響を受けています。1972年7月には渡部徹の死去に伴い松山美術研究所を引き継ぎ、また1975年には松山デザイン専門学校で教鞭を取り始め、後に校長も務めました。教育活動に力を入れる一方で県内および中四国において精力的に作品を発表し、墨という物質の持つ表現の可能性を探り、深い思索に基づいた制作活動を続けました。

この作品は、墨と和紙、そして綿布という日常的な異なる素材を用い、組み合わせて成立しています。墨は浅山が画業を通して用い続けてきた描画材で、その物質の持つにじむ性質により、制作者の意図の関与しないところで作用する点にも注目しているのです。墨が綿布や和紙に染み込む自然の力と、制作者としての表現との狭間で独自の哲学をもって思考し、制作に打ち込んだ浅山の代表的な作品といえるでしょう。(杉山)



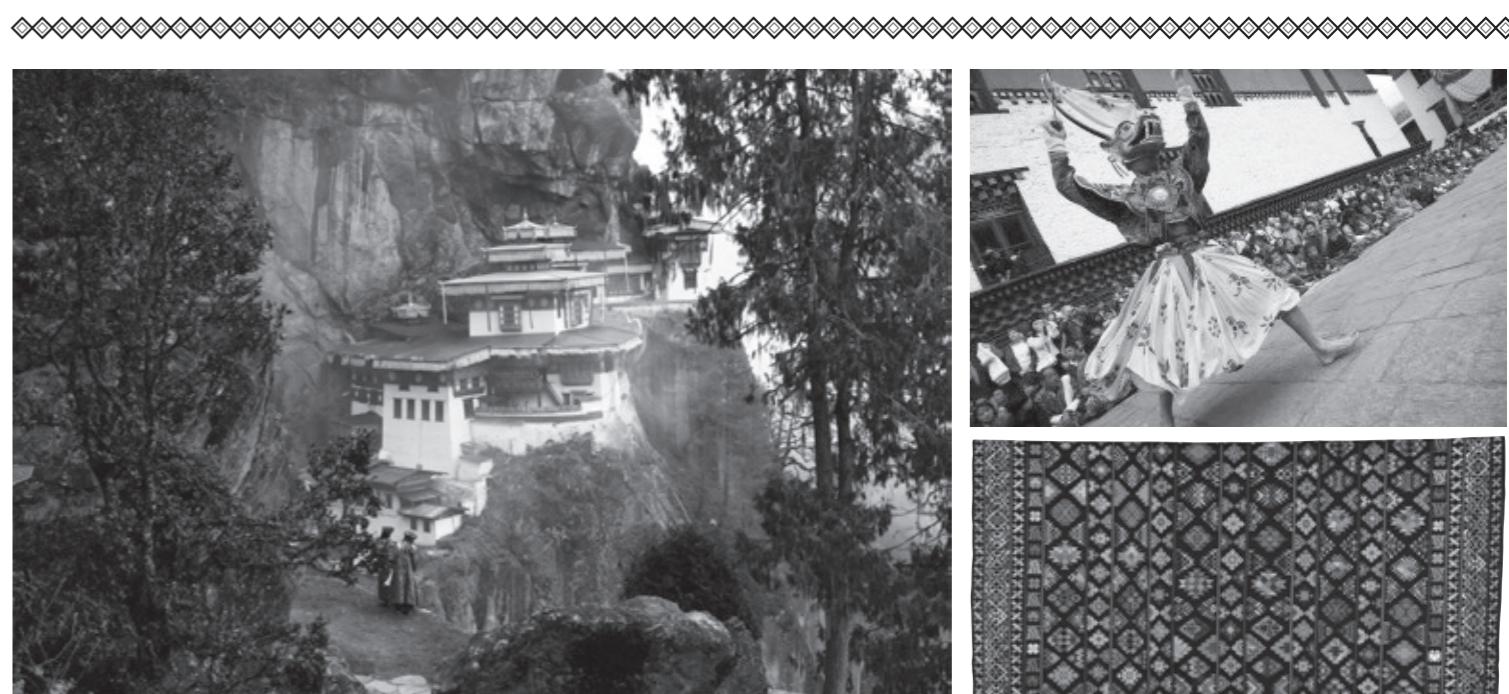
浅山仁《WORK IX》右《WORK X》左 各1988年3月



猫ブームということで、いろいろなメディアで猫が話題に。当館でもブームにのって「いつだって猫展」を開催します。猫より鳥に目がない私が気になるのは、今年度の友の会会員証の図版。杉浦非水の図案を使用しているのですが、モチーフはペリカン? サギ? なんの鳥かが議論になっています。(石崎)

愛媛県美術館ニュースNo.52 2016
発行日=平成28年7月10日
編集・発行=愛媛県美術館
執筆者=高橋仁、梶岡秀一、長井健、
杉山はるか、喜安嶺、八木誠一、鈴木有紀、
田代亜矢子、石崎三佳子

Canforo
カソフオロとは?
イタリア語で「くすのき」を意味します。
愛媛県美術館の中庭に立つ3本の大きなくすのきにちなんでなずけされました。



BHUTAN

日本・ブータン外交関係樹立30周年記念事業

特別展
ブータン

~しあわせに生きるためのヒント~

2016年7月30日土 ~9月19日月・祝

主催：特別展「ブータン」愛媛実行委員会(愛媛県、愛媛新聞社、テレビ愛媛、東映)

ヒマラヤの奥地にあるブータンという国をご存じですか?

この国はGNH(グロス・ナショナル・ハピネス=国民総幸福)という言葉のもと、あえて近代化を急がない政策をすすめています。2005年の国勢調査では、「あなたはいましあわせですか?」という質問に、調査対象者の約97%の人が「とてもしあわせ」、「しあわせ」と回答しました。

なぜこれほど多くの人が「しあわせ」を感じているのでしょうか。「しあわせ」とは何でしょうか。

本展覧会は、外務省による日本・ブータン外交関係樹立30周年記念事業の認定を受け、「ブータン王国国立博物館」、「ブータン王立織物博物館」、「ブータン王立テキスタイルアカデミー」の全面協力により、チベット仏教に関する仏像、仏画、法典や、お祭で使うお面や楽器、織物など、貴重な文化資料を日本で

《女性用衣装 キラ》20世紀後期 ブータン王立テキスタイルアカデミー所蔵

《アツラの面》現代
ブータン王国国立博物館所蔵

初めて公開します。さらにブータン王室のロイヤルコレクションから、国王の衣装・装飾品なども初公開。展示品約130点でブータンの魅力をたっぷりと感じいただけます。

また本展覧会は、イラストレーターの松尾たいこ氏をアートディレクターに迎えました。展覧会場は、本展覧会のためにブータンを訪れた松尾氏の優しくさわやかなイラストにより、ブータンに伝わる名言や智恵とともに、ブータンの和やかな空気を感じさせる魅力あふれる空間となっています。

本展を通してブータンの人々の「しあわせ」に触れるとともに、私たちがこれから時代を生きていく上での「しあわせになるためのヒント」が、きっと見つかることでしょう。(八木)



■開館時間
9:40～18:00（入室は17:30まで）
※企画展及び貸出しについては、入室時間が異なることがあります。各展覧会のページでお確かめください。
■休館日 月曜日
(祝日・振替休日及び第1月曜日に当たる場合は開館し、その翌日が休館日)

企画展 いつだって猫展

2016年 9月28日(水)～11月6日(日)



主催：いつだって猫展実行委員会

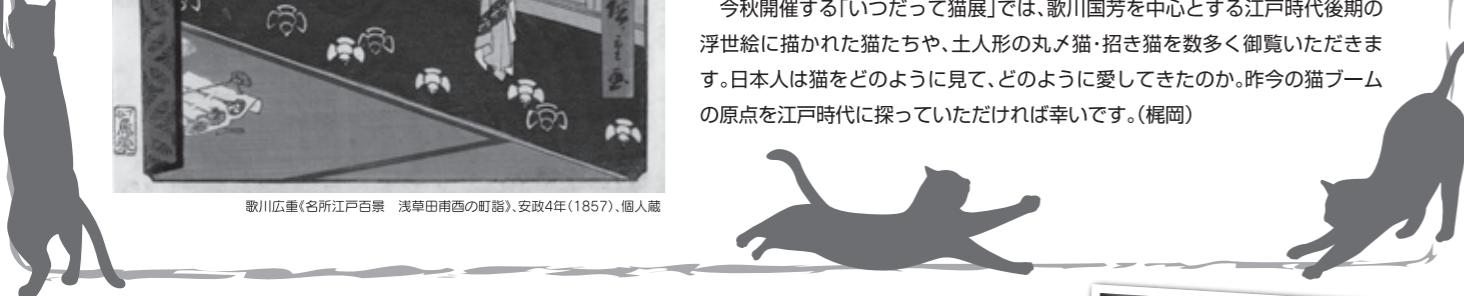
猫という動物の魅力の一つはその二面性にあるといえます。一方に「化け猫」がいるかと思えば、他方には「招き猫」もいます。現実の猫も、人に寄ってきたかと思えば、懐こともしない気難しさを見せます。あたかも人を惑わすかのようです。

古くは『源氏物語』に猫が登場します。この猫は、女三の宮という高貴なお姫さまに愛されながら暴れて困らせ、柏木という貴公子を惑わす原因を作り、ついには光源氏をはじめ関係者全員を不幸に陥れてしまいました。この恐ろしい結末の原因が愛らしい子猫でしかなかったことが、恐ろしさに深みを加えています。

犬が人間のパートナーであるとすれば、猫は気難しい同居人といったところでしょうか。何かを深く考えていそうな、不思議な近寄り難さが猫の魅力です。

そんな猫の魅力を見事に描き出した名画として、歌川広重の《名所江戸百景 浅草田甫西の町詣》があります。描かれているのは吉原の遊女の部屋。飼い猫が窓の外を眺めています。遠方には富士山が見えますが、手前の田んぼの畦道には、西の市で熊手を買って大勢の人々が行列をして歩いています。その賑わいに興味を持ったのか、猫は窓の外を見つめています。愛らしい後姿は、何か思索しているかのようにも、何もかも違観しているかのようにも見えます。

今秋開催する「いつだって猫展」では、歌川国芳を中心とする江戸時代後期の浮世絵に描かれた猫たちや、土人形の丸メ猫・招き猫を数多く御覧いただきます。日本人は猫をどのように見て、どのように愛してきたのか。昨今の猫ブームの原点を江戸時代に探っていただければ幸いです。（梶岡）



館外プログラムのご案内

あまり知られていないかもしれません、美術館では館外プログラムとして、学校や生涯学習施設などが企画する美術に関する講座やワークショップの依頼にお応えし、学芸員が出向き事業のお手伝いを行っています。

例えば、学校などの特別授業で、普段の授業ではできないような作品鑑賞や創作活動を楽しむことを望む先生に対し、依頼先と内容を相談しながら、詳細を決め、授業のお手伝いしています。また、生涯学習施設などの講座での、作家や美術史の講師依頼にも対応しています。

学校、児童施設、高齢者施設などの主催する事業の中で、自分たちの活動場所で作品鑑賞や創作活動を楽しみたい！美術の話を聞きたい！というとき、美術館までご相談いただければ、館外プログラムをお受けします。

館外プログラムの事例については、ホームページで紹介していますので、どういうことができるのか参考にしていただければと思います。（石崎）



窓外には、緑に囲まれた天守が二之丸や高石垣と調和して凛と立ち、この地のシンボルとして人々の営みを見守っています。青芝が鮮やかな広場では若男女が思い思いの時を過ごし、チビッ子たちの歡声も聞こえています。この恵まれた環境のもと、多くの県民の皆様に愛され、潤いと活力に満ちた地域づくりに貢献できる美術館を目指したいと思います。（高橋）

普及レポート

コロコロころころローラー版画

平成28年2月14日(日)・21日(日) 午前・午後(4回開催)

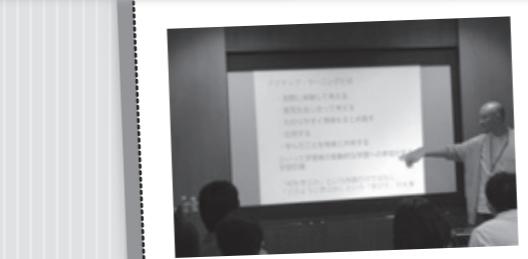
今回の参加者、子ども10名は寝れる程の大きな白い紙が、2歳から10歳までの子どもたちを迎みました。

紙を囲むように集合。その日の活動内容、布や紙をいろいろな形に切ったもの、エアキャップ、糸などを貼り付けたローラーにインクをつけて、紙に模様を写したり、大きな絵を描くことを伝えました。

はじめに準備運動。みんなにローラーになりきってもらい、大きな紙の上を横になって転げてもらいました。少し表情がほぐれたところで、好きなローラーを選び、ローラーの使い方を練習し、いよいよ本番。ローラーにインクをつけて、紙の上で転がし、紙の上に写されたローラーの模様に対面。ローラーを交換しながら、いろいろな模様を楽しむ子。気に入った模様のローラーをずっと使い続ける子。ローラーを二刀流に操る子。それぞれの楽しみ方をみつけ、いつのまにかローラー版画に夢中になりました。みるみるうちに画面は模様と色が重なりあい、渾身の作が出来上がりました。

共同制作の後は、パネルに個々の作品づくり。模様の組み合わせ、色、模様の置き方を考えながら、取り組んでいました。

子どもたちは、1時間、たっぷりローラー版画を満喫し、満足げな表情でアトリエを去っていました。また、次回をお楽しみに。（石崎）



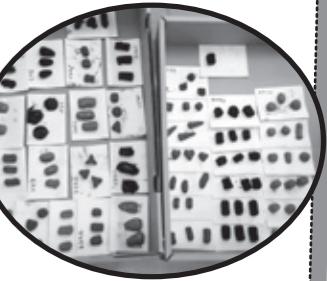
新田高等学校 体験学習

企画展鑑賞に併せ、来館時に何か創作体験をさせたい！新田高校よりご依頼がありました。先生と、滞在時間や人数を考慮しながら相談が始まり、今回は創作に当たられる時間が40分と短いこともあり、絵の具（パステル）作りをご提案。その場で、クラスの寄せ書きをしたいとの要望を受け、簡単に水彩絵の具も作ってボードに描画することになりました。パステルは、時間短縮のため一人で同色3個を作り、後で違う色を作った人と交換して3色セットにすることにしました。

何をしているのか分からないまま顔料と白いタルクの粉末を良く混ぜ、水を少しずつ足して更に練っていくと、白っぽかった色が徐々に濃くなり、ポロポロとした固まりに変化していきます。しっかりと練り形を整えると、人生初のパステル作りも終盤です。焦った人は、水を入れ過ぎネチョネチョとしたパステルが出来上がりります。何れも乾燥すると紙の上にしつらじとした軌跡を描き、指でさっそくと擦れるパステルが出来上がります。

パステル作りに使用した顔料の残りを利用して、パステルよりも数十倍も濃いアラビアゴム水溶液を混ぜ、水で好みの濃度に伸ばしたら、水彩絵の具の完成です。なんとお手軽？！混色しても良いのですが、何故か自分で作った色をそのまま使った人が多かった？！

アトリエは、5月末をもって南館の耐震工事のため、休室となりました。これからは館外プログラムとして、パステル作りも体験していただけます。ご依頼をお待ちしています♪（田代）



愛媛県美術館・博物館・ 小中学校共働による人材育成事業 『児童・生徒の「思考力」を育む ファシリテーター育成事業』について

愛媛県美術館では昨年度より、文化庁・地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業の一環として、総合科学博物館・歴史文化博物館、そして県内東・中・南予の各地域の小中学校との共働事業をスタートさせました。

この事業は県内の小中学校の先生方に「対話型鑑賞（Art Communication Project）」と呼ばれる鑑賞法のナビゲーター（司会役）の基本スキルをお伝えし、次期学習指導要領に記載されるアクティブラーニングを視野に、現場の児童・生徒のみなさんの学力向上に役立ててもらう、ということが一番のねらいです。

「対話型鑑賞」と言われる鑑賞法自体はもともと美術館から始まっているものなので、その基本となる、作品を「見る・考える・話す・聞く」という四つの力（プロセス）と、結果として鑑賞者側に培われる「どこから？どうして？精神」は、医療現場でも必須とされる能力であり、近年、日本の医学系の大学の入試でも作品鑑賞をとおして、観察力・推察力・批判的思考力・コミュニケーション能力・他人の話を傾聴する力等を鍛えていくとする傾向にあります。

本事業では、メンバーに図工・美術だけでなく、理科や国語、道徳、算数を担当する先生たちにもお集まりいただき、昨年度からの準備を経て、本年度は総本山の「ナビゲーター・トレーニングプログラム（ナビゲーターの基本スキルを身に付けてもらう）」が去る6月5日よりスタートさせました。今後の展開が楽しみです。（鈴木）

4月から美術館に着任しました！美術館の展望フロアといっぱいに広がる景色から、故郷に帰ってきた喜びを日々噛みしめています。これから皆さんと一緒に愛媛、美術館の魅力をどんどん発掘していきたいと思っています。（喜安）

